

内容紹介

数百万年という人類史のほとんどで、私たちは狩猟採集民だった。農耕民、国家や宗教、市場経済といった外部の変化のなかで、狩猟採集民はいかに生きてきたのか。考古学・人類学の知見を結集して、文明の起源と変容に迫り、壮大な地球環境史を描く。

主要目次

序論 狩猟採集民からみた地球環境史（池谷和信）

- 1 狩猟採集民の歴史の捉え方
- 2 地球の最初の住人・狩猟採集民
- 3 先史時代における農耕民との共生、農耕民への同化
- 4 前近代における国家や宗教とのかかわり方——世界システムと自然産物の担い手
- 5 現代社会で生きる人々——国民国家、市場経済、先住民運動
- 6 おわりに

I 先史狩猟採集民の定住化と自然資源利用

1 東南アジア・オセアニア海域に進出した漁撈採集民と海洋適応（小野林太郎）

- 1.1 はじめに
- 1.2 人類史からみた狩猟採集民と海域世界への進出
- 1.3 東南アジア・オセアニア海域への進出
- 1.4 完新世期における農耕民の出現と狩猟採集民

2 気候変動と定住化・農耕化——西アジア・日本列島・中米（那須浩郎）

- 2.1 はじめに
- 2.2 先史時代の定住化と農耕化の要因
- 2.3 西アジア
- 2.4 日本列島
- 2.5 中米
- 2.6 おわりに

3 西アジア先史時代における定住狩猟採集民社会（三宅 裕）

- 3.1 はじめに
- 3.2 広範囲生業革命
- 3.3 終末期旧石器時代の生業——広範囲生業の実態
- 3.4 定住化
- 3.5 新石器時代初頭の生業
- 3.6 「複雑な」狩猟採集民社会

4 古代アンデス狩猟採集民の農耕民化——神殿、交易ネットワークの形成（鶴見英成）

- 4.1 はじめに
- 4.2 狩猟採集民の農耕民化
- 4.3 形成期の神殿
- 4.4 論考

附論1 ボルネオの狩猟採集民の祖先は「狩猟採集民」か「農耕民」か（小泉 都）

- 1 従来の仮説——オーストロネシア語族の拡散とボルネオの農耕民の狩猟採集民化
- 2 ボルネオの現在の狩猟採集民
- 3 新しい知見——東南アジア島嶼部の人口の動きとボルネオでの生業活動
- 4 ボルネオの狩猟採集民の由来再考

II 農耕民との共生, 農耕民・家畜飼養民への変化

5 狩猟採集と焼畑の生態学 (佐藤廉也)

- 5.1 狩猟・採集・焼畑のバリエーションと地理的制約
- 5.2 狩猟・採集・焼畑の連続性と生業選択
- 5.3 狩猟・採集・焼畑と人口パターン——人口は独立変数か?
- 5.4 残された問題

6 東南アジア島嶼部における狩猟採集民と農耕民との関係 (金沢謙太郎)

- 6.1 はじめに
- 6.2 農耕民から派生した狩猟採集民?
- 6.3 仮説への反論
- 6.4 狩猟採集民と農耕民の共生モデル
- 6.5 生活戦略の多元化
- 6.6 おわりに

7 コンゴ盆地におけるピグミーと隣人の関係史——農耕民との共存の起源と流動性 (大石高典)

- 7.1 はじめに
- 7.2 狩猟採集民・農耕民関係を捉える理論の展開——隔離モデルから相互依存モデルへ
- 7.3 生態人類学と民族誌——野生ヤム問題をめぐる論争
- 7.4 石器時代から鉄器時代へ——野生ヤム問題の考古学へのインパクト
- 7.5 鉄生産による環境変化と狩猟採集民と農耕民の社会関係
- 7.6 ピグミーと隣人の関係の新たな展開——商業民を通じた市場とのつながり
- 7.7 おわりに

8 熱帯高地アンデスにおける狩猟民から家畜飼養民への道——アルパカ毛の利用に着目して (稲村哲也)

- 8.1 はじめに
- 8.2 現代のアンデスの牧畜の特徴
- 8.3 先史時代のアンデス高原——考古学的研究から
- 8.4 ビクーニャの生態と追い込み猟「チャク」
- 8.5 考察
- 8.6 おわりに

附論2 南の海の狩猟民と隣人——インドネシア・ラマレラのクジラ猟 (関野吉晴)

- 1 はじめに
- 2 クジラ漁の実際
- 3 マッコウクジラの解体と分配
- 4 物々交換
- 5 これからの課題

附論3 狩猟採集から複合生業へ——タンザニアのサンダウエ社会における農耕と家畜飼養の展開（八塚春名）

- 1 生業変容の過程を追う
- 2 「狩猟民」サンダウエ
- 3 「農耕民」サンダウエ
- 4 狩猟採集から複合生業へ——家畜飼養と農耕の普及
- 5 「狩猟民」であり「農耕民」である

III 王国・帝国・植民地と狩猟採集民

9 北東アジア経済圏における狩猟採集民と長距離交易（手塚 薫）

- 9.1 広域的な物流のネットワーク
- 9.2 オホーツク文化とアイヌ文化
- 9.3 デンネルモデル
- 9.4 大陸など外部社会の文物へのアクセス
- 9.5 長距離交易で行き交う資源
- 9.6 集約・商業的な狩猟採集文化への転換

10 統治される森の民——マレー半島におけるオラン・アスリと隣人との関係史（信田敏宏）

- 10.1 はじめに
- 10.2 オラン・アスリ
- 10.3 王国の時代——マレー人との両義的關係
- 10.4 イギリス植民地時代——新たな隣人との出会い
- 10.5 開発とイスラーム化の時代——マレーシア独立以降
- 10.6 グローバル化の時代——先住民運動の高まり
- 10.7 おわりに——オラン・アスリの未来、森の未来

11 南西アフリカ（ナミビア）北中部のサンの定住化・キリスト教化（高田 明）

- 11.1 「カラハリ論争」を越えて
- 11.2 ナミビア北中部のクン
- 11.3 ナミビアのフィンランド人宣教師
- 11.4 クンとアコエの定住化・集住化
- 11.5 キリスト教化するクン
- 11.6 おわりに

附論4 植民地時代のピグミー（松浦直毅）

- 1 はじめに
- 2 植民地時代のピグミーの生活と民族関係
- 3 ピグミーの過去から現在

IV 近代化と狩猟採集民

12 狩猟採集民の定住化と人口動態——半島マレーシアのネグリトにおける事例分析（小谷真吾）

- 12.1 狩猟採集民の人口動態にかんする研究の現状
- 12.2 オラン・アスリと対象集団の概要
- 12.3 センサスの方法

- 12.4 現住人口
- 12.5 出生率
- 12.6 死亡率
- 12.7 狩猟採集民の人口動態と定住化政策

13 国立公園の普及と中部アフリカの狩猟採集民（服部志帆）

- 13.1 はじめに
- 13.2 国立公園制度と保全プロジェクトの普及
- 13.3 アフリカの熱帯雨林とピグミー系狩猟採集民
- 13.4 カメルーンの森林保全プロジェクトと狩猟採集民の生活
- 13.5 バカの反応
- 13.6 森林保全プロジェクトへの狩猟採集民の参加

14 アマゾンの森林開発のもとでの現代的な民族間関係（大橋麻里子）

- 14.1 ペルーアマゾンのシピボとアシャニンカ
- 14.2 アマゾンの土地区分——氾濫原と高地，そしてシピボの土地利用
- 14.3 シピボの漁と狩猟
- 14.4 シピボとアシャニンカの差異と補完関係
- 14.5 ペルーアマゾンの森林開発と民族間関係
- 14.6 おわりに

15 森のキャンプ・定住村・町をまたぐ狩猟採集民——ボルネオ，シハンの現代的遊動性（加藤裕美）

- 15.1 はじめに
- 15.2 森のキャンプ，定住村，町にまたがる柔軟な住まい方
- 15.3 多箇所居住における隣人との関係の重層性
- 15.4 まとめ——グローバル社会とのつながりを住まい方からとらえる

附論5 狩猟採集民・農耕民・文明人における病気と病（山本太郎）

- 1 はじめに——原初の医学から狩猟採集民の時代
- 2 旧石器時代の人骨が語ること
- 3 農耕の開始がすべてを変えた
- 4 生態系への際限のない進出と感染症
- 5 現代人の健康と病気
- 6 まとめ

結論 地球の先住者から学ぶこと（池谷和信）

- 1 はじめに
- 2 本書の3つの意義
- 3 狩猟採集民研究と地球学

あとがき

執筆者紹介